The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	MARIE DE FRANCE : 人物と作品の成立順
Author(s)	大高, 順雄
Citation	Gallia. 1973, 12, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

MARIE DE FRANCE

—人物と作品の成立順—

大　高　順　雄

I：人物

LAIS[1]，*FABLES*[2]，*ESPURGATOIRE ST. PATRICE*[3]（以下それぞれを*L*，*F*，*E*と略）の3作品は同一の人物によって作られたと考えられているが，これらの作品の作者については，おのおのの作品に含まれている記述から推測できるにすぎない．

まず，Chaucer 研究家 Thomas Tyrwhitt（1730—1786）は *LAIS* 全体の *Prologue* を「ロンドン集」*Recueil de Londres* と称せられる大英博物館所蔵写本 Harley 978 に収録せられた全作品の作者とみなした[4]．この考えによれば，*L*と*F*とはともに Marie の作となる．

つぎに，Gervais de La Rue 師は Tyrwhitt の所説を肯定し，始めて Marie de France の生涯と作品とに関する著作を公けにした[5]．

やがて，Tyrwhitt の説は正しいものと認められるようになり，*L*を Marie de France に帰属させる根拠が *Prologue* にあることは看過せられるに至った．

しかし，Joseph Ritson は Tyrwhitt の説に異論を唱え，*Prologue* を*L*の編纂人による序言とみなし，*F*の *Epilogue* に読まれる1文：「わたしの名は Marie，フランスの産」Marie ai nun, si sui de France（v. 4）に着目して，たんに*F*だけでなく，*L*をも Marie に帰属させた[6]．

また，George Ellis は*L*の最初の56行すなわち *Prologue* を*L*全体の序文

であり，続く26行を*L*の1篇 *Guigemar* の序文であるとした[7]．

ついで，Francis Douce も「ロンドン集」に収められた諸作品は Bretagne の吟遊詩人 bardes の作ではなく，*L*の1篇 *Guigemar* の *prologue* に現われる Marieという人物の作であるとした[8]．

確かに，*L*全体の *Prologue* と *Guigemar* の *prologue* とは別箇のものと考えなくてはならない．パリ国立図書館所蔵写本，Fonds Français 2168 には*L*の3篇 *Yonec* (vv. 396-552)，*Guigemar*，*Lanval* がこの順序で含まれ，*Guigemar* の冒頭にだけ *prologue* が読まれる．現在では，Marie の名が現われる1行を *Guigemar* の *prologue* に含めることに異論を唱える学者はいない．

それではここで，*L*，*F*，*E*の各作品から Marie の名が読まれる箇所を引き出してみよう．

1) *Guigemar* の *prologue* (vv. 3-4)[9]

Oëz, seignurs, ke dit Marie,
Ki en sun tens pas ne s'oblie.

この世にあって努めを忘れぬ，
マリの言葉を，みなさま，お聞き下さい．

2) *F*の *Epilogue* (vv. 3-4)[10]

Me numerai pur remembrance :
MARIE ai nun, si sui de France.

思い出のよすがとして名乗りましょう：
私の名はマリで，フランスの産です．

3) *E* (vv. 2297-2299)[11]

Jo, Marie, ai mis, en memoire,
Le livre de l'Espurgatoire
En Romanz,……

私マリは，忘れ去られないように，
「錬獄」の書を
フランス語に移しました，……

上記3箇所が Marie を*L*，*F*，*E*の3作品の作者であると推定させる直接の手懸りである．*F*の*Epilogue* によって，Marie はフランスと関係のあった人物であると判断せられる．当時の政治情勢から考えると，この「フランス」とは「フランス王家」を指すものではなく，狭い意味の「フランス」すなわち Ile-de-France という地名を意味するのであろう．Marie は Ile-de-France という生地に言及したと思われる．しかし，強いて生地に言及するのは，その生地以外の所においてであるとするのが妥当ではなかろうか．それでは，Marie はどの地に関係をもっていたのか．

つぎに，Marie が関係した地方を推定させる箇所を引用しよう．

1) *L. Milun* (vv. 319-322 ; 332-333)[12]

A Suhthamptune vait passer ;
Cum il ainz pot, se mist en mer.
A Barbefluet est arivez ;
Dreit en Brutainë est alez.
……
De tutes les teres de la

Porta le pris e la valur ;

サウザンプトンに渡ろうとし，
昔なし得たように，海に出ました．
バルフルールに至ると，
ブルターニュに直行しました．
……
そこから向うのすべての地から，
勲功と栄誉とを持ち帰りました．
[Suhthamptune : Southampton. Barbefluet : Barfleur.]

この引用文で「そこ」とはフランスを指すものと考えられ，この条りではイングランドが問題になっていることは明らかである．Marie は Cherbourg の近くの Barfleur から英仏海峡を渡って Southampton におもむいたことがあったのであろう．

2) *L. Eliduc* (vv. 484-486)[13]

As chambres sa fille est entrez.
As eschés cumence a jüer
A un chevaler de utre mer ;

王は娘の部屋にはいられました．
海の彼方の一人の騎士と
チェスに興じ始められました．

ここに言う「海の彼方」とはやはりフランスを指すものと考えられる．Marie はイングランドの地に住んだ経験が確かにあったのであろう．

3) *F*の *Epilogue* (vv. 11-18)[14]

M'entremis de cest livre feire
E de l'engleis en romanz treire.
Esopë apel' um cest livre,
Quil translata e fist escrire,
Del griu en latin le turna ;
Li reis Alvrez, que mut l'ama,
Le translata puis en engleis,
E jeo l'ai rimee en franceis,

私が企てたことはこの書を作り，
英語からフランス語に訳すことでした．
この書は「イソップ」と呼ばれ，
それを訳し記させた者がそれを
ギリシア語からラテン語に訳したのです．
それを珍重せられたアルフレッド王が
ついでそれを英語に訳し，
私がそれをフランス語の韻文に直したのです．
[Alvrez : Alfred]

これからも分るように，Alfred 王はラテン語訳の「イソップ」を英語に重訳したとせられ，Marie はその英訳本からフランス語訳の*F*を作成したという．さて，この英語訳本の成立時期は不明であり，それを Alfred 王に帰属させることは誤りである[15]．ともあれ，Marie が英訳本を参照したこと，英語を理解したことは確かではなかろうか．Marie はイングランドの地に滞在しただけでなく，その地の言語をも解したのであろう．

4) *E* (vv. 503-505)[16]

El tens le rei Estefne dit,
si cum nus trovum en escrit,
qu'en Yrlande esteit uns prozdum

ステファヌス王の御世に,
書き物に記されているように,
立派な方がアイルランドにいたとのことです.
[Estefne : Etienne, Stephanus]

ここに言及せられた Stephanus 王とは, Guillaume le Conquérant の孫に当る Etienne de Blois (1097?—1154) であろう. 王の名を挙げることができるほどに, Marie はイングランド宮廷に強い関心を抱いていたと考えられる. しかも, *E*の源となったラテン語文「聖パトリキウスの錬獄」*Tractatus de Purgatorio sancti Patricii* はイングランドの Saltrey 修道院の僧 Henricus の手になるものであった.

これら以外にも, *L*や*F*には多くの英語の単語やイングランドの地名が挿入せられている[17].

上述の諸点を考え合わせると, Marie はイングランドに渡ったことがあり, その地の宮廷と関係をもち, 英語を解したと推定することができるであろう.

*　　*　　*

それでは, Marie とは現存した人物のうち一体だれであったのか. この点については諸学者の見解が一致しない.

まず，Shaftesbury 尼修道院長の Marie（歿1215～6）が考えられる[18]．この女性はイングランド王 Henry 二世の父 Godefroy d'Anjou，すなわち，Geoffrey of Plantagenet の私生児であり，1181年ごろこの尼修道院の修道院長になっている．

つぎに，Marie de Beaumont すなわち Marie de Meulun が挙げられる[19]．この女性は Waleran de Beaumont の娘であり，Hugues Talbot de Cheuville と結婚したが，寡婦となってからは Herefordshire と Devon とで生活し，1230年から1232年まで Ronceray 尼修道院長であった．

さらに，Barking 尼修道院長に Marie と呼ばれる女性が考慮の対象となる[20]．

最後に，Marie de Champagne（歿1208）をも指摘することができよう[21]．この女性は Champagne 伯 Thibaud 四世の娘で，1142年 Bourgogne 公 Eudes 二世と結婚し，1162年に Fontevrault 尼修道院長になっている．

これら4人の Marie はいずれも Marie de France と同一人物であるとみなすには証拠に欠ける．Rychner はどの Marie をも支持しなかった[22]．Bertoni は Marie de Champagne がイングランドに滞在した証拠がないとして，この女性を否定した[23]．

従って，Marie de France が実在の人物の誰であったかを判断するためには，Marie de France と交渉をもったと考えられる人物を探す必要に迫まられる．

まず，*L* の *Prologue* に次のような献辞が読まれる（vv. 43-48）[24]．

En l'honur de vus, nobles reis,
Ki tant estes pruz e curteis,
A ki tute joie se encline,
E en ki quoer tuz biens racine,
M'entremis des lais assembler,
Par rime faire e reconter.

まことに立派で雅びなお方であり，
すべての喜びを一身に集め，
すべての善を心に宿された
高貴な王であるあなたの為に
私は抒情譚詩を集め，韻文を作り，
語ろうと思いつきました．

Marie から献辞を捧げられたのは誰であったか．これについては2説がある．

ほとんどすべての学者の見解は英国王 Henry 二世（1133—1189）に一致している．この王は1154年に王位につき，1189年に他界した．Marie がこの王の在位期間中に*L*の *Prologue* を書き，この作品を献呈したと考えることは可能である．

他の説によれば，Henri au Cort Mantel が挙げられる[25]．この王は上記Henry二世の子であり，1170～1年と1172年とに2度にわたって戴冠式を挙げ，1183年に父に先立って他界した．この説を採った Levi の論拠は，上掲引用文にある王に対する讃辞が当時財政上の不如意に悩まされていた Henry 二世には相応しくない，むしろその子に対するものであろう，ということであった．しかし，この讃辞は Henry 二世がまだ比較的富裕で，万人の敬意を受けていたころに Marie によって書かれたと解釈することも許されよう．従って，かならずしも Henri au Cort Mantel を主張することが正しいのではなかろう．

つぎに，*F*の *Epilogue* には次のようにある（vv. 9-12）．

Pur amur le cunte Willame,
Le plus vaillant de nul[cest] realme,
M'entremis de cest livre feire
E de l'engleis en romanz treire.

どの［この］王国のなかで［も］最も立派な
ウィリアム伯のために，
私はこの書を作り，英語から
フランス語に翻訳しようと企てました．

この「ウィリアム伯」とは誰であったのか．これについては5人の人物が想定せられる．

まず，William of Gloucester が挙げられる．この人物は Henry 二世の幼な友だちであったから，その宮廷で Marie の関心を惹いたことは十分にあり得よう．この説は Ahltröm が1892年と1925年との2度にわたって主張した[27]．

つぎに，Guillaume Longue-Epée（歿1226）が考えられる．この人物は1174年に Henry 二世の寵愛を受けた Rosamund Clifford（1140？—1176？）とこのイングランド王との間にできた私生児であり，1196～7年に Count of Salisbury，1198年に Earl of Salisbury となり，1202年 Gascogne に対するフランス王代理人 lieutenant に任じられた．Marie はやはり Henry 二世の宮廷でこの人物に出会ったことがあると思われる．古く La Rue が1834年に，ついで Warnke が1880年にこの説を唱えた[28]．

さらに，Guillaume Maréchal（1146—1219）が挙げられる．この人物は1199年 Count of Pembroke となり，1216年から1219年まで第1代の Earl of Striguil and Pembroke，および，Regent of England を兼ねており，Henry 二世の子の師傅であった．この説をたてたのは Levi であった[29]．

ちなみに，Guillaume de Flandre が問題になる．しかし，この人物は *COURONNEMENT DE RENARD*（vv. 3360-3363）[30] の次の1文から推定せられるものである．

Et pour çou dou Conte Guillaume
Qui ceste honor eut encharcie,

Pris mon prologue com Marie
Qui pour lui traita d'Izopet.

私はこの名誉を一身にになった
ギヨーム伯のために序文を加えた.
この伯のためにイソップを作った.
マリの例にならったのである.

この「ギヨーム伯」とは Guillaume de Dampière 二世 (歿1251)で，1246年から1251年まで Flandre 伯であり， 1248年に聖王 Louis 九世および年代記作者 Joinville に従って十字軍に参加している. しかし， Marie がこの Guillaume に「イソップ」すなわち*F*を捧げたとは考えられない. この人物は時代的にも遅く，Henry 二世の宮廷とは別の文化圏に属している Flandre 伯の宮廷に Marie がおもむいた形跡はないからである.

最後に，最も信憑性のある人物として，Guillaume de Mandeville(歿1189)が考えられる. この人物は Henry 二世の寵臣であり， Philippe d'Alsace の十字軍に加わり， 1167年に Count of Essex になり， Guiot de Provins の *BIBLE* のなかでは立派な美しい騎士として讃えられている[31]. この人物を主張したのは1892年に Ahlström が最初であったが[32]， 1926年に Brugger がそれに続き[33]，1933年に Painter がその後をうけて次のように論じた[34]：Guillaume de Mandeville は Count of Essex になった時から1175年まで，Normandie 裁判所の書記 échiquiers の文書には， 単に comes Wilhelmus として現われるが，他の伯は伯領名を付加されている；Marie de France はこの慣わしを知っており，*F*の *Epilogue* にあるように，この人物を単に Conte Guillaume と呼んだとしても不思議ではない.

上記の諸点から推定すると，Marie de France は1181年ごろ Shaftesbury 尼修道院長となり， 1215年ないし1216年に他界した女性で， イングランド王 Henry 二世の父 Godefroy d'Anjou の私生児であったのではなかろうか.

もしそうであるとすれば，Marie が*L*をこの Henry 二世に捧げたとしても不自然ではなく，*F*をこの王の寵臣であった Essex 伯 Guillaume de Mandeville のために作ったとしても，おかしくはないであろう．

II：作品の成立順

さて，*L*は何年ごろ成立したのであろうか．*F*が Guillaume de Mandeville に捧げられたように，*L*が Henry 二世に献じられたと仮定すれば，この両作品はこのイングランド王とこの Essex 伯とが共に歿した1189年より前に成立していなければならない．しかし，両作品には成立年が記されていないので，それらと直接的・間接的に関係のある同時期の作品とそれらとを比較しながら，成立年を推測する以外に方法はなかろう．

まず，*L*に影響を及ぼした作品のうち，成立年の明らかなものは Wace の *BRUT*[35]（1155）と *ROMAN D'ENEAS*[36]（ca. 1160）である．従って，1155年～1160年が*L*の成立年としては上限 terminus a quo であろう．

12世紀中葉の作品としてはほかに，*FLOIRE ET BLANCHEFLEUR*[37] と Béroul の *TRISTAN*[38] とがある．Marie が前者から何を負っているかは不明であるが，後者からは確かに影響を受けている．しかし両作品の成立年は不明である．

一方，*L*が影響を与えた作品を挙げてみよう．

まず，Thomas の *TRISTAN*[39] がある．Fourrier の最近の研究によれば，この作品は1172年～1175年に成立したことになる[40]．ただし，Hoepffner はこの作品の成立を*L*より前に置いている[41]．Fourrier と Hoepffner とはあまりに見解を異にしすぎる．もう少し明確な資料はないであろうか．

その点では，Denis Piramus の *VIE SEINT EDMUND LE REI*[42] が挙げられる．作者は Marie についてこう述べている（vv. 35-48）．

E Dame Marie altresi,
Ki en rime fist e basti,
E compensa les vers de lais,
Ki ne sunt pas de tut verais ;
Si en est ele mult loee,
E la rime par tut amee.
Kar mult laiment, si lunt mult cher
Cunte, barun e chivaler.
E si en aiment mult lescrit,
E lire le funt, si unt delit,
E si les funt sovent retreire.

そして奥方マリもまた
抒情譚詩を韻文により作り，
考え練り上げたが，それらは
いささかも真の話ではない．
そのためにマリは絶讃を受け，
その抒情譚詩は皆に好まれた．
伯も諸侯も騎士たちもそれを
大そう好み愛でるからである．
マリの書き物は大そう好まれ，
読まれ，喜びを与え，
しばしば語られる．

この作品の校訂者 Ravenel は，この作品の成立を言語の面からは1170年～1200年，内容の面からは1190年～1200年に位置させた[43]．他の校訂者 Kjellman は作者 Piramus を，1173年ごろから記録に現われ，1214年に他界したと推定せられる St. Edmund 修道院の magister Dionisius とみなし，主に

言語の点からこの作品の成立を1170年～1180年に位置させた[44]．この時期が*L*の成立年の下限 terminus ante quem と考えられる．

それでは，*PARTONOPEUS DE BLOIS*[45] はどうであろうか．やはり Fourrier によれば，この作品は1182年～1185年に成立したとせられる[46]．この年は少し遅すぎると考えてよかろう．

次に，*ILLE ET GALERON*[46] を見てみよう．これは「2人の妻を持つ夫」を主題とし，種々の点で *ELIDUC* に似ている．Ille の父として Eliduc が登場するだけでなく，*lai* に対する言及もある（vv. 936-937）．

Mes s'autrement n'alast l'amors,
Li lais ne fust pas si en cours,

しかしこの愛が別な風にならなければ，
この抒情譚詩はこれほど広まらなかったであろう．

ここに言われた抒情譚詩 lai ははたして Marie de France の *LAIS* を指すものであろうか．上掲2行に至る902行から937行は MS. de Wallaton には含まれていない．校訂者 Cowper の考えによれば，作者 Gautier d'Arras はここで自分自身の作品の源流をなす lai に言及したのではなく，フランス大陸に渡って来て宮廷で評判になっていた Marie de France の *LAIS* を批判していることになる[47]．それはともかくとして，この作品の *Prologue* には，Friedrich Barbarossa の妻 Beatrice に対する献辞が読まれる．そこからこの作品が Beatrice の戴冠式が行われた1167年より後に成立したことは明らかであろう．Fourrier は成立年を1178年としている[49]．この年は上掲 *VIE SEINT EDMUND LE REI* によって推定せられた下限1170年～1180年と抵触しない．

最後に，Chrétien de Troyes と Marie de France との関係はどうであろうか．Foulet は Chrétien の *EREC* において主人公 Erec が勝利のあとで

味わう「歓び」を Marie の影響に帰する[50]. 反対に, Wilmotte は Marie の *Guigemar* と *Eliduc* とが, それぞれ Chrétien の *CLIGÉS* および *GUILLAUME D'ANGLETERRE* とから剽窃した箇所をもつと考える[51].
問題のくだりを引用してみよう:

Guigemar (vv. 109-112)[52]	*CLIGÉS* (vv. 639-642)[53]
Jamais n'aies tu medecine!	Que ja n'an avrai garison
Ne par herbe ne par racine	Par mecine, ne par poison,
Ne par mire ne par pociun	Ne par herbe, ne par racine
N'avras tu jamés garisun.	A chascun mal n' a pas mecine.
決して薬はない.	薬物や水薬によっても,
薬草や薬根によっても,	薬草や薬根によっても,
医者や水薬によっても,	決して癒されまい.
決して癒されまい.	どの病にも薬はない.

つぎに, *Eliduc* (vv. 815 et sqq.)[54] には嵐に翻弄される舟の描写があるが, これは *GUILLAUME D'ANGLETERRE* (vv. 2265 et sqq.)[55] の描写に類似している.

同じく, Faral は Marie が*L*に着手した時期を1175年ごろとし, そのころ romans bretons がすでに流布していたと考え, Marie が Chrétien に援助を求めたと主張する[56].

これに反して, Rychner は Marie に対する Chrétien の影響を認めないが, *L* の *Prologue* (v. 32)[57] : Itant s'en sunt altre entremis [他の方がたがそれをずいぶん手がけられたのです]によって, 少くとも Marie が Chrétien による Ovidius のフランス語訳を知っていたと考える[58].

しかし, Marie は Chrétien から影響を受けなかったとする方が正しいであろう. 両者の作風と文体とは違いすぎるからである.

要するに, Marie de France の*L*の成立時期は, Ewert によれば Henry

二世が他界した1189年より以後[59]，Rychner によれば1160年代とせられるが[60]，Wace の *BRUT* と *ROMAN D'ENEAS* とが完成した1155～60年と Chrétien de Troyes が制作にたずさわった1170年ごろとの間とするのが妥当であろう．

*　　*　　*

上述のとおり，*L*を1155～60年と1170年ごろとの間に成立したと仮定することができるとすれば，*F*と*E*とは*L*と時期的にどういう関係があるのであろうか．もう一度*L*の *Prologue* (vv. 28-33)[61] をみてみよう：

Pur ceo començai a penser
De aukune bone estoire faire
E de latin en romaunz traire ;
Mais ne me fust guaires de pris :
Itant s'en sunt altre entremis.
Des lais pensai k'oï aveie ;

そこで私は何か良い話を作り
ラテン語からフランス語に
訳そうと考え始めたのでした．
でもそれはあまり名誉にならなかったでしょう．
他の方がたがそれをずいぶん手がけられたのです．
聞き覚えた抒情譚詩が頭に浮びました．

最初の3行から，「良い話」bone estoire とはラテン語で書かれた文学作品を指すものと考えられる．続く3行から，Marie はその作品のフランス語訳を中断し，*L*の制作に着手したと推定せられる．それでは，この「良い話」と

は何であろうか．Marie の文学作品は*L*のほかに*E*と*F*としかない．既出の引用文に見られるように（本論 p. 3），*E*はラテン語からの翻案であった．一方，やはり既出の引用文にあるように（本論 p. 5），*F*は英語から訳出せられたものである．Marie が*L*の *Prologue* で*E*に言及したとは考えられないであろうか．もしそうだとすれば，Marie はまず*E*の制作に着手したが，競うべき相手が多いため，名声を博することが困難であろうと知り，それを中止したのであろう．当時においても，女性の文学活動は悪しざまに言われたに違いない．*Guigemar* の *prologue* も，妬み心のある人びとに言及している（vv. 7-11）[62]：

Mais quant il ad en un païs
Humme u femme de grant pris,
Cil ki de sun bien unt envie
Sovent en dïent vileinie ;
Sun pris li volent abeisser :

しかしある国に，男であれ女であれ，
極めて立派な人がいらっしゃった時，
その人のよさを妬む者は，
よくそれについてひどい事を言い，
立派さを貶しめようと思うのです．

Marie は序文あるいは跋文に制作上の意図とか釈明とかを述べる．*L* の *Prologue* に*E*に対する言及があれば，*F* に対する言及があってもよいはずである．Marie は神の摂理とラテンの文人 Priscianus の作風とを楯に取り，英国王 Henry 二世の庇護のもとに身を置きながらも，*L*の *Prologue* の口調に自信のなさをかくしきれない．

これに反して，*F* の *Prologue* にはすでに文学上の名声を得た作者の自信

が表われている（vv. 27-37）[63]：

A mei, ki dei la rime faire
N'avenist nïent a retraire
Plusurs paroles quë i sunt ;
Mes nepuruc cil me sumunt
Ki flurs est de chevalerie,
D'enseignement, de curteisie ;
E quant tel hume me ad requise,
Ne voil lesser en nule guise
Que n'i mette travail e peine,
Ki que m'en tienge pur vileine,
De fere mut pur sa preerie ;

韻文を作るはずの私には，
そこにある多くの話を語るなど
まったくふさわしくなくいはずです．
とはいえ，知識と宮びと騎士道の
華と謳われる御方が求められます．
こうした御方に求められたのでは，
どなたからひどい女と謗られようとも，
その求めに応えて力を尽そうと
努め励まないではけっして
おられないのでございます．

Marie は「知識と宮びと騎士道の華」とここに謳われる「ウィリアム伯」cunte Willame（本論 p. 13）から依頼を受けたからには，悪評を受けようとも，*F*を制作しようという意志を述べている．恐らく，作者は*L*の成功を知

ったのちに，*F*を作り上げたのであろう．小心の Marie は*L*の *Prologue* において*E*の中止に言及したが，制作する意図をまだ抱いていない*F*には，当然のことながら，触れなかったのであろう．

このことから，Marie de France はまず*L*を完成したのち，*E*と*F*とを完成したと考えてよいであろう．

それでは，*E*と*F*とはどちらが先に作られたのであろうか．*E*の成立年を決定する1つの手懸かりは次の3行にある（vv. 2073-2075）[64]：

Nevoz al tierz seint Patriz,
ki compain ert seint Malachiz ;
Florenciëns aveit a nun.

その人は聖パトリキウス三世の甥で，
聖マラキアスの友であり，
フロレンティアヌスと呼ばれました．

このくだりが事実を述べているとすれば，Malachias は1189年6月6日に聖列に加えられたのであるから，*E*はこの年より以後に書かれたことになる．また，この作品は Marie の手によってラテン語の原本からフランス語に訳出せられたものであるとすれば，そのラテン語の原本より以後に書かれたものでなくてはならない．さて，Warnke の研究によって，その原本は Saltrey 修道院の僧が1185年より以後に作った *Der Tractatus de Purgatorio s. Patricii* である[65]．

さて，本論のⅠ：「人物」において論及したように，Marie de France が創作にたずさわった時期は12世紀の後半であろう．また，*L*は前記のとおり1170年までに成立したと考えられる．

Ewert は*L*を1189年より少し前に，つぎに*F*を，最後に*E*を1189年より少し後に位置づける[66]．同じく，Rychner はまず*L*が作られ，ついで Guillaume

de Mandeville に捧げられたと仮定せられる*F*が1167年～1189年に成立し，*E*が Malachias の聖別年である1189年より以後に書かれたとする[67]．両者はともに*L*-*F*-*E*の順序を立てる．

しかし，Mall や Cohn はこれとは全く逆に，*E*-*F*-*L*の順番を主張した[68]．これには具体的な根拠はないように思われる．

さらに，Levi は*L*を1183年以前，*E*を1185年ごろ，*F*を1189年以後に置き[69]，Nagel もこの順序*E*-*F*-*L*を主張する[70]．これにも根拠が乏しいようである．

ちなみに，Paris と Warnke とは*E*を除外して*L*-*F*の順番をたてたが[71]，Paris は後に見解を変え，*F*-*L*-*E*を正当であると考えるようになった[72]．

このように，3作品の成立順序については，諸学者の一致した見解を見るに至っていない．しかし，Ewert と Rychner とが推定した*L*-*F*-*E*が最も信憑性あるものと考えられる．

NOTES

1) -*Marie de France, LAIS*, edited by A. Ewert. (Blackwell's French Texts). Blackwell, Oxford, 1947. Reprinted 1960.
-*Les Lais de Marie de France*, publiés par Jeanne Lods. Champion, Paris, 1959. (CFMA 87).
-*Les Lais de Marie de France*, publiés par Jean Rychner. Champion, Paris, 1966. (CFMA 93).

2) -*Marie de France, FABLES*, selected and edited by A. Ewert and R. C. Johnston. Blackwell, Oxford, 1966. (Blackwell's French Texts).

3) -*Das Buch von Espurgatoire S. Patrice der Marie de France und seine Quelle*, hgg. von Karl Warnke. Niemeyer, Halle, 1938.

4) -TYRWHITT, Thomas. *The Canterbury Tales of Chaucer, to which are added an Essay upon his Language and Versification, an Introductory Discourse, and Notes.* (5 vol. London, 1775-1778.) 2nd edition, 2 vol. Oxford, 1798. pp. 99 et sqq.
-cf. *British Museum General Catalogue of Printed Books*, t. 242, col. 1011.

5) -LA RUE, Abbé Gervais de. *Dissertation on the Life and Writings of*

Mary, an Anglo-Norman Poetess of the thirteenth Century in *Archeologia* 13(1800), pp. 35-67.

6) RITSON, Joseph. *Ancient English Metrical Romanceës.* 3 vol. London, 1802. t. III, p. 330.

7) -ELLIS, George. *Specimens of Early English Metrical Romances, chiefly written during the early part of the fourteenth century.* 3 vol. 1805. 2nd edition, 1811. t. I, p. 144.

8) -WARTON, Thomas. *The History of English Poetry from the Close of the 11th to the Commencement of the 18th Century.* 3 vol. London, 1774, 1778, 1781. *New edition carefully revised, with numerous additional notes and index*, by Ritson, Ashby, Douce, and Park, and other eminent antiquaries, and by the editor (R. Price). 4 vol. London, 1824. t. I, p. iii, n. d.

9) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 3.

10) -EWERT, A. *op. cit.* (2). p. 61.

11) -WARNKE, K. *op. cit.* (3).

12) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 110.

13) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 139.

14) -EWERT, A. *op. cit.* (2). p. 62.

15) -EWERT, A. *op. cit.* (2). pp. x-xi.

16) -WARNKE, K. *op. cit.* (3).

17) -FOULET, Lucien. *English words in the Lais of Marie de France* in *Modern Language Notes* 20 (1905). pp. 108-110.

-BRUGGER, Ernst. *Eigennamen in den Lais der Marie de France* in *Zeitschrift für französischen Sprache und Literatur* 49 (1926). pp. 201-252, 381-484.

18) -FOX, John. *Marie de France* in *English Historical Rewiew* 25 (1910). pp. 303-306.

-FOX, John. *Mary, abess of Shaftesbury* in *English Historical Review* 26 (1911). pp. 317-326.

-EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 1.

19) -HOLMES, U. T. *New thoughts on Marie de France* in *Studies in Philology* 29 (1932). pp. 1-10.

-HOLMES, U. T. *History of Old French Literature.* New York. pp. 186-191.

-HOLMES, U. T. *Further on Marie de France* in *Symposium* 3 (1949). pp. 335-339.

-WHICHARD, R. D. *A note on the identity of Marie de France* in *Romance*

Studies presented to Willaim Morton Dey. Chapel Hill, 1950. pp. 177-181.

20) -LEVI, E. *Studi sulle opere di Maria di Francia* : I. *Il Re Giovane e Maria di Francia* ; II. *Maria di Francia e le abbazie d'Inghilterra* in *Archivum Romanicum* 5 (1921). pp. 448-493.

21) -WINKLER, E. *Französische Dichter des Mittelalters* II : *Marie de France* in *Wiener Akademie der Wissenschaften, Sitzungsberichte, Phil.-hist. Klasse* 188 (1918).

22) -RYCHNER, J. *op. cit.* (1). p. viii.

23) -BERTONI, G. *Maria di Francia* in *Nuova Antologia* 292 (1920). pp. 18-28.

24) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 2.

25) -LEVI, E. *op. cit.* (20).
-MOORE, O. H. *The Young King Henry Plantagenet* (1155-83) in *History, Literature and Tradition* [Ohio State University Studies II, 12 (1925)]

26) -EWERT, A. *op. cit.* (2). p. 62.

27) -AHLSTRÖM, A. *Studier i den fornfranska lais literaturen*. Uppsala, 1892.
-AHLSTRÖM, A. *Marie de France et les lais narratifs* in *Göteborg K. Vetenskaps och Vetterhets Samhälles Handlingar*, Fjärde Följden. 29, 3 (1925).

28) -LA RUE, Abbé Gervais de. *Essais historiques sur les Bardes, les Jongleurs et les Trouvères*. Caen, 3 vol. 1834.
-WARNKE, K. *Über die Zeit der Marie de France* in *Zeitschrift für Romanische Philologie* 4 (1880). pp. 223-248.

29) -LEVI, E. *op. cit.* (20).

30) -*Le Roman du Renart*, publié par D. M. Méon. Paris, 1826, t. IV, p. 122.
-*Le Couronnement de Renard, poème du treizième siècle*, éd. par Lucien Foulet. Princeton-Paris, 1929. p. xxxiii.

31) -*Les Oeuvres de Guiot de Provins, poète lyrique et satirique*, éditées par John Orr. Manchester University Press, 1915. v. 388, p. 21.

32) -AHLSTRÖM, A. *Studier i den fornfranska lais literaturen*, Uppsala, 1892.

33) -BRUGGER, E. *Die Lais der Marie de France* in *Zeitschrift für französische Sprache und Literatur* 49 (1926). p. 119.

34) -PAINTER, S. *To whom were dedicated the Fables of Marie de France* ? in *Modern Language Notes* 48 (1933). pp. 367-369.

35) -*Le Roman de Brut de Wace*, édité par Ivor Arnold. Paris, Droz, 1938-40. (SATF)

36) -*Enéas*, édité par J. J. Salverda de Grave. Paris, Champion, 1925-26. (SATF)

37) -*Floire et Blancheflor*, édité par Edélstand Du Méril. Paris, Janet, 1856.

(Bibliothèque Elzévirienne)

-*Li Romanz de Floire et Blancheflor*, édité par Felicitas Krüger. Berlin, Ebering, 1938. (Romanische Studien 45)

38) -*Le Roman de Tristan par Béroul et un anonyme*, édité par Ernest Muret. Paris, Firmin Didot, 1903. (SATF 49)

-*Béroul, Le Roman de Tristan*, édité par Ernest Muret. 3e édition revue. Paris, Champion, 1928. (CFMA 12)

39) -*Le Roman de Tristan par Thomas, poème du XIIe siècle*, édtité par Joseph Bédier, Paris, Firmin Didot, 1902, 1905. 2 vol. (SATF 46, 1-2)

40) -FOURRIER, A. *Le Courant réaliste dans le Roman courtois en France au moyen âge*, t. I. Paris, 1960, p. 109.

41) -HÖPFFNER, E. *Thomas d'Angleterre et Marie de France* in *Studi Medievali* 7 (1934). pp. 8-23.

42) -*La Vie Seint Edmund le rei, poème anglo-normand du XIIe siècle par Denis Piramus, publiée avec introduction, notes et glossaire* par Hilding Kjellman. Göteborg, Wettergren & Kerber, 1935. (Göteborgs kungl. Vetenskapt och Vitterhetssamhaltes Handlingar 5, ser. A, Bd. 4, nr. 3)

43) -*La Vie Seint Edmund Le Rei, an Anglo-Norman Poem of the Twelfth Century bv Denis Piramus, edited with introduction and critical notes* by Florence Leftwich Ravenel. Bryn Mawr Pennsylvania, Pennsylvania, 1906. p. 53. (Bryn Mawr College Monographs, Monograph Series 5)

44) -KJELLMAN, H. *op. cit.* (42). pp. cxxii et sqq.

45) -*Partenopeus de Blois*, édité par G. A. Crapelet & A. C. M. Robert. Paris, Crapelet. 1834. 2 vol. (Collection des anciens Monuments de l'Histoire et de la Langue française 12)

46) -*Ille et Galeron par Gautier d'Arras*, publié par Frederick A. G. Cowper. Paris, Picard, 1956. (SATF)

47) -COWPER, F. A. G. *op. cit.* (46). p. xxxii.

48) -MATZKE, John E. *The Source and Composition of "Ille et Galeron"* in *Modern Philology* 4 (1907). pp. 1-18.

-SHELDON, E. S. *On the date of "Ille et Galeron"* in *Modern Philology* 17 (1919). pp. 87-96.

-SHELDON, E. S. *The new Manuscript of "Ille et Galeron"* in *Modern Philology* 18 (1921). pp. 145-152.

-COWPER, Frederick A. G. *The Sources of "Ille et Galeron"* in *Modern Philology* 20 (1922). pp. 35-44.

-GUYER, Foster E. *Chronology of eraliest French Romances* in *Modern Philology* 26 (1929). p. 277.

49) -FOURRIER, A. *op. cit.* (40). p. 384.

50) -FOULET, L. in *Romania* 49 (1923). pp. 132-133.

51) -WILMOTTE, M. *Marie de France et Chrétien de Troyes* in *Romania* 52 (1926). pp. 353-355.

52) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 3.

53) -*Les Romans de Chrétien de Troyes édités d'après la copie de Guiot (Bibl. nat. fr. 794)* II : *Cligés*, publié par Alexandre Micha. Paris, Champion, 1957. p. 20. (CFMA 84)

54) -EWERT, A. *op. cit.* (1). pp. 148 et sqq.

55) -*Chrétien de Troyes, Guillaume d'Angleterre, roman du XIIe siècle*, édité par Maurice Wilmotte. Paris, Champion, 1962. (CFMA 55). pp. 70 et sqq.

56) -FARAL, E. *Histoire de la Littérature française illustrée*, publiée sous la direction de J. Bédier et P. Hazard. t. I, Paris, 1923. p. 23.

57) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 1.

58) -RICHNER, J. *op. cit.* (1). p. xi.

59) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. x.

60) -RICHNER, J. *op. cit.* (1). p. xii.

61) -EWERT, A. *op. cit.* (1). pp. 1-2.

62) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. 3.

63) -EWERT, A. & JOHNSON, R. C. *op. cit.* (2). p. 1.

64) -WARNKE, K. *op. cit.* (3).

65) -WARNKE, K. *op. cit.* (3). pp. iv et sqq.

66) -EWERT, A. *op. cit.* (1). p. x.

67) -RICHNER, J. *op. cit.* (1). p. xii.

68) -MALL, E. *Zur Geschichte der mittelalterlichen Fabellitteratur und insbesondere des Esope der Marie de France* in *Zeitschrift für Romanische Philologie* 9 (1885). p. 163.

69) -LEVI, E. *Sulla cronologia delle opere di Maria di Francia* in *Nuovi Studi Medievali* 1 (1922).

70) -NAGEL, E. *Marie de France als dichterische Persönlichkeit* in *Romanische Forschungen* 44 (1930). p. 22.

71) -PARIS, G. *Littérature française au Moyen Age (XIe-XIVe siècle)*. Paris, Hachette. 9e éd. 1890. p. 274 : *Tableau chronologique*.

-*Die Fabeln der Mariede France, mit Benutzung des von Ed. Mall hinter-*

lassenen Materials, hgg. von Karl Warnke. Halle, Niemeyer, 1898. Einleitung, pp. cxv-cxvii. (Bibliotheca Normannica 6)

72) -PARIS, G. Compte rendu de "*L'Espurgatoire seint Patrice*" *of Marie de France, published with an introduction and a study of the language of the author by Thomas Atkinson Jenkins*, Philadelphia, Ferris, 1894, pet. in-8°,150 p. in *Romania* 24 (1895), p. 295.

(本学教授)

P. S. —— Nous exprimons notre gratitude pour le Centre d'Etudes Médiévales et Romanes et pour le Centre de Recherches Anglo-Normandes, où nous avons pu profiter d'importants documents afin de rédiger cet article.